

森本 幸裕

もりもと ゆきひろ

公益財団法人京都市都市緑化協会理事長、
京都大学名誉教授

景観生態学、環境デザイン学



- 昭和45年 京都大学農学部農学科卒業
- 同 52年 京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学
- 同 60年 農学博士（京都大学）
- 同 52年 京都芸術短期大学助手
- 同 53年 京都芸術短期大学講師
- 同 56年 京都芸術短期大学助教授
- 同 63年 京都芸術短期大学教授
- 平成 4年 京都造形芸術大学芸術学部教授
- 同 5年 大阪府立大学農学部教授
- 同 12年 大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授
- 同 13年 京都大学大学院農学研究科教授
- 同 14年 京都大学大学院地球環境学堂教授
- 同 24年 京都大学名誉教授
- 同 24年 京都学園大学バイオ環境学部教授
- 同 25年 京都学園大学バイオ環境学部特任教授（～30年）
- 同 25年 公益財団法人京都市都市緑化協会理事長

- 昭和61年 日本造園学会賞（研究論文部門）
- 平成25年 日本造園学会田村剛賞
- 同 25年 京都環境賞（大賞）
- 同 27年 日本公園緑地協会北村賞
- 同 29年 たなべ・ハピネス賞
- 同 29年 日本造園学会上原敬二賞
- 令和 4年 松下幸之助花の万博記念賞松下幸之助記念賞
- 同 4年 日本緑化工学会賞功績賞
- 同 6年 ICLEE2024 Outstanding Contribution Award
- 同 6年 土木学会論文賞

受賞者紹介

「景観生態学的研究を基盤とした都市における自然再生」に関する功績

人の生活環境である都市にも、多少なりとも緑があり自然がある。原生的自然環境にある植生も重要であるが、我々が日々接している都市のなかの緑を制約のある中で守り、豊かな生物多様性を育てていくことにも大きな価値がある。しかし、緑を育てるといっても、単に樹木を植栽するだけでは十分な効果は得られない。自然の中では植物や動物が相互に作用しあいながら生態系を作っている。そのようにしてできる景観を空間的な階層として把握することが景観生態学と呼ばれる分野である。造園学に関して深い学識を持つ森本幸裕氏は、さらに都市の自然の景観生態学的視点から研究を長年にわたり先駆的に進め、都市の自然を再生し、人にもそこに住む生物にも快適な環境を作り出す努力をしてきた。

森本氏は、まず京都をフィールドとして、植物、鳥類、魚類など複数分類群を対象に、都市緑地の規模・分布と生物の分布の関係を明らかにした。これは、パッチ、コリドー、マトリクスから構成される景観構造が生物種に与える正と負の影響を実証的に研究したものであり、フィールドと理論の双方向的研究が景観生態学の発展に大きく寄与した。これらの研究をもとに2006年に公表された「近畿圏の都市環境インフラのグランドデザイン」の策定、国土交通省による「都市の生物多様性指標（素案）」の開発を牽引するなど、都市および地方計画への実装化に貢献した。

都市に新たに形成された公園緑地の動態を、長年のモニタリングによって明らかにしたことも重要な研究成果である。1970年に開催された大阪国際万博の会場跡地約270haは、万博記念公園として整備されたが、森本氏らはここで1990年代にモニタリングを行い、自然林と比較して造成林の自然再生が遅れていることを明らかにして、自然林の倒木を模した間伐や表土撒き出しなどによる改善策を提案した。さらに、2000年代に再度のモニタリングで生物相の多様化などの効果を確認している。京都の梅小路公園の1haの小規模な「いのちの森」でも京都盆地の本来の植生の再生を目指し、モニタリンググループを組織して25年以上にわたり活動し、数多くの分類群の動態を明らかにして、都市内で再生された自然地の管理に関する有用な知見を得た。

都市の自然はアメニティ源としてだけではなく、グリーンインフラとして人間の生活基盤を守る効果もある。森本氏は、敷地に降った雨を直ちに排水するのではなく地中に浸み込ませる「雨庭」を整備することによって都市型洪水の緩和と、生物の生息環境の改善を提案し、その実現に尽力してきた。

近年は、原生的な自然環境にある生物を保護するだけでは地球の生物多様性を守ることができず、人為的な環境にある生物の保全も重要であることが注目されている。森本氏は2010年に名古屋で開催された第10回生物多様性条約締約国会議(CBD-COP10)の際、合わせて開催された「都市と生物多様性」会議の共同議長として、都市の生物多様性保全の重要性の普及に努力してきた。その流れのなかで森本氏は、身近にあり多様な生物が生息する区域を保護するために2023年に制定された「自然共生サイト」の認定を行う審査委員長も務めている。

さらに、他にもいくつかの学会で重要な役割を果しており、日本緑化工学会会長、日本景観生態学会長などを歴任し、学会の発展に尽力するとともに2004年には日本・韓国・台湾の複数の学会の連合体としてLandscape and Ecological Engineering 国際コンソーシアム(ICLEE)を設立して会長を務めるなど国際的にも活躍してきた。

森本氏は、このような活動によって景観生態学を基盤とした学術研究を大きく発展させ、さらにその成果を造園的な技術として実社会の中で活用してきた。また、それらの成果を日本国内にとどまらず世界に発信した同氏の功績は、高く評価されるものである。